

堤防高下げ3・8メートルに

気仙沼 内湾 湾口防波堤、フラップゲート採用

気仙沼市の内湾地区復興まちづくり協議会（菅原昭彦会長）のワーキングが11日、市役所ワン・テン庁舎で開かれ、提言書案について協議した。魚町・南町の堤防高を海拔3・8メートルに下げするため、県が提示した複数案から湾口防波堤を選択するとともに、余裕高分はフラップゲートの採用を要望する方向性を確認した。26日の全体会へ提案する。

協議会が提言書案

内湾地区には海拔え。

5・2メートルの堤防高が計画されていたが、住民の要望を受け、神明崎から柏崎へ湾口防波堤を整備することで余裕高を無くし、3・8メートルにできる選択肢などを県が提示していた。各地区の住民代表による協議会は、湾口防波堤を取り入れることを前提にまちづくりを進めることで、防潮堤問題を決着させる考

討を重ねる。 災害危険区域設定に懸念する意見が多いこ



提言書の内容などを話し合ったワーキング

ただ、余裕高を無くすと、東日本大震災級の津波が背後地へ越流する量が増えるため、稼働式のフラップゲート（浮力で起き上がる堤防）を3・8メートルの防潮堤の上部に整備することを合わせて要望する方針。湾口防波堤の景観対策、水質への影響や航行の安全性に配慮した位置や形状については引き続き検討

とから、魚町の地盤かさ上げを計画より高くするほか、危険区域内でも市独自支援が受けられるように制度の見直しを求める。

なお、協議会が県へ要望していた津波シミュレーションによって、湾口防波堤を岩井崎―大島横沼（高さは海拔3・92メートル）、大島長崎―唐桑津本（同4・52メートル）に設置した場合の津波軽減効果が報告された。魚町では堤防高を1・2メートルほど下げられる可能性を確認できたが、防波堤の外側となる杉ノ下や大谷の津波高が上がった。

この結果を受け、菅原会長は「堤外の津波高が上がり、景観の問題もある。費用は1千億円ともされるが、効果の面からも採用は難しい。協議会としては、要望を続けることは不可能と判断した」と説明した。

市県へ提出することになる提言書の内容は、16～21日にかけて地区ごとでさらに話し合い、26日午後6時から市民会館で開く予定の全体会で確認する。